

8月16日(日)には妹の出席する教会である高座渋谷教会の礼拝に参加いたしました。それは礼拝後に、妹と共に、厚木霊園に両親の墓参りに行くことになっていたからです。

その日、主任牧師は休暇で、代わりに玉川大学文学部教授のルターの研究者・小田部進一先生が説教をしてくださいました。その時、昨年研究のため滞在しておられたドイツのミュンヘンでの出来事を話して下さり、その内容に非常に驚いたのです。それは、ミュンヘンのカトリック教会の活動についてでした。ドイツには移民が非常に多くいて、移民の子どもたちは心の寄り処を得られず、精神的にも、情緒的にも不安で、教育的に不備な環境で暮らしている。教育的配慮のために、イスラム教徒の子どものために、モスクを建て、そこへ行けるように資金援助をしているということでした。それは私には衝撃的なことでした。

最近、シリア難民の悲劇が報道されていますが、プロテスタントであるドイツ福音主義教会(EKD)のホームページのニュース(9月7日)を見て、小田部先生のお話しを思い出しました。



Bishop Heinrich Bedford-Strohm , Cardinal Reinhard Marx

ドイツのプロテスタント教会とカトリック教会の代表者たちがミュンヘン駅でハンガリーとオーストリアを経由して新たにやって来た難民を歓迎している写真(左、EDKのニュースより)が掲載されていました。

また、世界教会協議会(WCC)の総書記であるRev. Dr Olav Fykse Tveit氏(ノルウエー人)が9月4日に南米コロンビアで発表したメッセージも載っていました。その一部を紹介します。

**今日ヨーロッパは、東も西も両方とも、人間の尊厳と権利にどのように関わって行けるかという力を試されているのです。我々人間の価値とキリスト教の信仰の伝統を試されているのです。今日ヨーロッパ諸国は第二次大戦以来最悪の難民の危機に直面しています。けれども残念ながら我々の憐みや行動は、緊急な必要性に間に合うには、不十分であるようです。紛争、弾圧、極端な貧困によって逃亡せざるを得なくなった人々にすべてのヨーロッパ諸国は、それぞれ相応しい受け入れの責任を取り、安全、より良い未来、避難場所を求める人々を支援することです。責任を取るという事は、彼らの必要とする基準で、差別なく、なされなければなりません。我々は彼らの宗教を基準に避難民を拒否している国々があると聞いて衝撃を受けています。WCCは、教会が、外国人を受け入れ、到着、乗り継ぎ、そして最終的な目的地へいけるように助けて、温かい対応ができるように手助けいたします。我々はこの恐ろしい苦しみを緩和することに最大の貢献をすることが出来るよう、超教派の教会の協力を必要としています。**

イエス様自身がヘロデ王を逃れ、エジプトへ難民となって行ったこと、また、「お前たちは、わたしが飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し」(マタイ25:35)というイエス様の言葉に促されているとのこと。

玉川大学のホームページで、小田部先生のエッセイを読みました。ラテン語の聖書をドイツ語へ翻訳したルターの「宗教的な行為の中に、教育的な態度、しかも当時の教育の在り方を転換させるような態度を読み取ることができます。母国語への翻訳は、すべての人に、開かれた教育と言葉の習得による主体的な人間の形成を視野に入れた行為でした」という文章がありました。ドイツの教会が開かれた教育、主体的な人間の形成を目指し、自国民だけでなく、異教のイスラムの人々へも同じ目で援助の行為をしているのだ、ドイツ人はそういう信仰を持っているのだと実感したのです。